

灯籠

根来 滯子

8月、新型コロナウイルスが世界中に旋風を巻き起こしているが、例年通り、日本にはお盆の季節がやってきた。死者の霊を自宅に迎えるというこの日、私も人並みにサイドボードの上に祭壇を作って3人の写真を飾り、一对の盆灯籠を置いた。



この灯籠は25年前に逝った夫の新盆の時に、義弟が贈ってくれたものである。大きな段ボールの箱に入ったその灯籠はひと夏使っただけで、長いこと押し入れの隅に入れておけばなしであった。それを25年ぶりに取り出して飾った。原色の赤、青、黄色などに彩られゆつくりと回転している。照明を落とすと、闇の中に浮き上がり、まるで人工の世界に迷いこんだように幻想的で、不思議な郷愁を掻き立てられる。

祭壇の上の写真は61歳で旅立った夫のもの。その隣に、昨年の暮れ、アメリカの地で、55歳で夫の後を追った長女のもの。いずれも晴れやかな笑顔である。今にも黒枠の額縁から「久しぶり！」などと言って飛び出してきそうだ。そうしてもう一枚は保育器に入っただけのところを眺めている赤ん坊の写真である。その瞳はおおきく、しっかりと意志を持った顔立ちで口元を大きく開けているが、泣いているのか、笑っているのか不明だ。何事も亡念したように私に無言の訴えかけをしている。写真を手に取って、「由利ちゃん」と呼び掛けた。たった一枚の写真を残して、母親に抱かれることもなく生後20日間の命を終え、この世から消えてしまった私の子供だ。私は結婚してから、私の二人の分身と、身近にいつもいるはずの夫を失った

のだ。

今年は、長女衣里の新盆なので、夫が亡くなった後、

久しぶりに盆灯籠を取り出した。アメリカでは死者の霊を祀る日はあるのだろうか。聞いていないが、天に召されて幸せに過ごしていると信じているお国柄である。きっと彼らなりに祈りをささげているのだろう。

私は3人の霊を迎えるために果物やお菓子など、祭壇をできるだけ豪華に整え、菊の花を飾った。「もうすぐ私もあなた達の所に逝くからね」とつぶやく。人は何気なく過ごしていても、人知れず、抱えているものはおおきい。私は蠟燭に揺らめく3人の写真を眺めながら、残されている者の「生きてある苦」を思う。折りに触れ、突然込み上げる悲しみから一生解放されることはないだろう。そうして健在であればもう50歳を過ぎている次女「由利」に想いを巡らせる。

21、2年前、34歳でアメリカに渡った長女衣里からの電話が、まるで昨日のことのように思い出される。あの時、私は衣里の疑問に真実を伝えることができなかった。あいまいな態度をとった。とっさの質問にとまどったのだ。いつも正面から向き合うことなく、ごまかしながら目をそらしてきた。しかし、このことは長女衣里と三女の奈見の二人の娘にしっかりと伝えなければ

ばならないことである。由利の出生についてである。

20年前にさかのぼる。夫を失って、虚ろな日々を過ごしていた日々、子供を身もごったという、うれしい電話をもらったのは、当時35歳だった衣里がイギリス人ステイブと結婚をし、アメリカ、サンフランシスコに移住してすぐの、1999年、初夏のことであった。サンフランシスコの病院で産むという。「ママも手伝いに来てね」「もちろんよ」。予定日は年が明けてミレニアムの1月初めだということ、受話器をもってルンルン気分の私に衣里はさりげなく聞いてきた。「私の妹の、生まれてすぐに亡くなった由利ちゃんのことだけど、病名は何だったの」「えーと」と一瞬言いよどんだ。「先天的に心臓が悪かったんだけど、どうして？」と聞き返した。「病院で聞かれたのよ、羊水の検査もあるから大事なことですって」「そうー」そうなのか、秘密にしようとしたわけではないが、話題にするには苦しすぎる由利について語る言葉を失った。

衣里はアメリカで希望にあふれて子供を出産しようとしている。いつかは伝えなければならぬと思うていても、今ではない。東京に住む三女の奈見が姉より先に結婚して2人の子供を出産した時も、とても言え

ないことだった。産まれて20日で亡くなったが戸籍にしつかりと記載されている次女由利の病氣、それは出産に立ち会ったお医者様と夫と、当時健在だった私の両親と2人の友人しか知らないことであつた。私が話すことなく逝つてしまえば、由利は姉と妹にあたる二人の姉妹にとつてはほとんど記憶にさえとどめない戸籍上の存在になつてしまふだろう。お医者様はそのほうがいいといつた。むしろ、出生届も出さずに、闇に葬つてしまおうとしたが、予想以上に生命力が強く、2週間後に「由利」と命名して戸籍に記載され、20日間、この世に生を受けることができた。私は大事な、愛する由利のために、二人の娘に真実を話しておかなければと思うに至つた。それが由利に対する母としての誠意であり、当然の義務なのだ。

結婚当初、夫の仕事の関係で、都心まで1時間20分も私鉄に乗るような、田園風景の残る小さな街に住んでいた。その地方では一応名医という評判を持つていた産婦人科病院で、二人目の子を帝王切開で出産をするために、私は手術台の上にいた。1967年（昭和42年）の真夏のことである。蟬が精いっぱい鳴きたてる昼さがり、麻酔がさめかけて意識が戻りそう

になつた時、真つ暗闇の底から渦巻のような「？」マークが沸き上がつては消え、また大きな塊のマークがもくもくと、沸き上がってくる。何故？ 何故？ 私ほもがきながら渦に埋もれそうになり、一生懸命に何者かに語り掛けていた。帝王切開では麻酔は赤ん坊のためにあまり強く掛けることはできない。手術中も時々意識の上に浮上するのだが、「どうして？」という疑問が沸き上がるのだ。私は朦朧としたなかで必死になつて問いかけていた。「何故？」

目覚めたとき、病室のベッドに寝ていた。枕元で本を読んでいた夫は私の手を握り、手術は無事に終わったこと、子供は保育器で寝ていることを静かに話した。「なにも心配しないでゆっくり休むといいよ」。麻酔がさめかかった時の痛みで、生まれた子供が女の子であると聞いただけで、安堵と疲労でまた深い眠りにおちた。しかし翌日も、またその翌日も子供は私の傍に連れてこられることはなかった。夫は、今は私の身体のほうが大事だから、すべて回復してからといつたが、3日たつて、回診のとき、傷の手当をしただけで、話しかけることもなくそそくさと病室を出ていこうとするお医者様に意を決して訊ねた。「私の赤ちゃんは？」翌日、院長先生が枕元に立つた。そうして想像もし

ていなかったことを告げられた「よく頑張ったね、でも赤ちゃんは残念ながら病氣をもって生まれてきたんだよ。先天的な障害で、手厚く治療をしても絶対に治ることのない「脊髄破裂と水頭症」という重病で、この異常は起き上がることもできず、鮮明な感情を持つこともなく、次第に生命の灯が薄れて、長くてもせいぜい一年ぐらいの寿命でしょう。生きていても本人はただ苦しいだけ。あなたも同じように苦しむだけです。あなたには健康な子供がいる、障害児を抱えた生活がどんなに大変なものか、とても想像できないほどのものです。生まれてきたばかりの赤ちゃんはまだ人間としての機能は未完成です。保育器に入っているが、このままそつと逝かせてあげるのが赤ちゃん本人にとつても、また家族にとつても、一番いいことだと思いません。赤ちゃんはあなたが老いてあの世で会ったとき、きつとあなたに感謝してくれるはずですよ。一時の感傷に溺れてはいけない、未練がでるから保育器には近づかないように」

「脳天を割られるような宣告に私はまたもや「？」マークの渦の中に埋もれ、まぶしくきらめく真夏の光は鋭い鋼のように私を貫いた。どうして私の子供がこんなことに？こんな不条理があつていいものだろうか。」

どうして？ 単純な疑問なのに、正解を得ることのできない問いかけ。それからの日々、飲ませることのできない、あふれ出る母乳を止めるために胸に氷を当てて冷やす。私に話しかけるのをためらうような夫や周りの人たち。慰める言葉がないのだ。私は頑なだった。付き添いに頼んだ看護師さんに、保育器での子供の様子を話してもらった。3000グラムもある、かわいらしい赤ちゃんで、絶えず口を動かして乳を探すという。ミルクを与えることをお医者様に禁じられているので、哺乳瓶で水だけを与えているのが辛いと彼女は涙ぐんだ。愕然とした。保育室に行くことを禁じられていたが、耐えられなくて夫に子供の写真を撮ってきてくれるように頼んだ。

新生児用の真っ白な産着を着て、脊髄の傷も見えず、頭を白い布で覆い、大きな目をしっかりと見開いているわが子は、とても異常があるようには見えなかった。自分の運命を知る由もないその顔は無心で、本当に美しかった。

「私の大事な子供です。たとえどんなに重篤な異常があろうとも手を尽くして育てていきたい、生きる意欲があつて懸命にお乳を求めているのに、どうせだめだからと水だけ与えて放置するのは殺人と同じではない

か、この子は絶対に家に連れて帰ります。」

私はベッドの上を転げまわって泣いた。しかしそれも一度だけであった。3歳になったばかりの長女の衣里が、パパと一緒に病院にきてくれる。「ママ、何時お家に帰れるの、ママがいないと詰まらない」と私の枕元に顔を伏せる。ふと我に返り、私はとにかく冷静になる必要があった。夫はすべて私に任せるといったが、私自身の産後の平安のために、夫と衣里との日常の平安のために、由利の介護を放棄するという厳しい決断を私は数日の間にしなければならなかった。

障害児を抱えて、心身ともに疲れ果ててしまうだろう苦痛はどれほどのものか。それを安易に避けようとする私のエゴ。たとえお医者様が強く進めてくれてその方向に事は進んでいたとはいえ、最終的に私が決心することであった。たしかにあの時点で、子供には薄命であったとしても、生きようとする力があつたと思う。それをお医者様と共謀して見捨てた。

現代ではどんなに小さな産婦人科病院でも、医療の限りを尽くして子供の命を救うことが求められている。たとえ、一生涯、障害が残ろうとも、命が第一なのだ。しかし、往時の産婦人科医にあつては、道義的に許されないことかもしれないが、おそらく数多く経験して

きたであろう自然淘汰という現実を見据えてのことであり、障害児を持った親の悲惨を目の当たりにしてきた医師のある種の恩情であり、「冷めた目」だったのだ。現実の問題として、流産、早産、中絶と日常のように繰り返される親の不幸を目の当たりに見てきた産婦人科医の冷静な判断だったとおもう。健全に生まれても、すぐに亡くなる子供の数は、現代とは比べ物にならない時代でもあつた。お医者さまは夫に障害児を介護するうえで様々な困難を具体的に引用して納得するよ

うに説明をしてくれたという。私と夫はそれに従って「意志的に」わが子を葬った。帝王切開の傷は回復したが、私は退院することができなかった。保育器での子供の生命力はお医者様の想像以上にしっかりしていて、2週間たち、「由利」と命名して市役所に出生届をだした。由利は20日間、この世に生を受け、「障害」という運命を負ったばかりに、愛情に包まれることなく、ひっそりと逝った。病院で紹介してくれたお寺に葬った。ただの一度も由利を抱くこともなく、顔を見ることさえなく、私はひとりで退院した。

この罪を贖罪するために私はそれまでの放埒だった私の生き方を悔い、これからの人生を家庭の平和のた

めに、よき妻、良き母となることを神に誓った。神—この大いなるもの、それを神と呼ぶならば、神にすがって由利にたいする罪悪感から救われようと願った。

同じころ、名古屋在住の、大学時代の友人が「無脳児」と呼ばれる障害児を続けて2度も出産していた。

脳の欠損をもつこの障害は重篤で、生まれてすぐに亡くなったという。子どもは名古屋大学医学部付属病院の研究室に置かれ、ホルマリン

漬けになって保存されているという。彼女の紹介で私も名古屋大学付属病院を受診した。

現在でも、脊髄系の異常児を出産する原因は特定されていないが、特殊なカルシウムと葉酸の不足も原因の一つとされているとのことで、大学病院で薬を処方していただいで飲み続けた。一年後、3度目の帝王切開に挑戦。当時、3回までと言われている帝王切開出産をぎりぎりの状態で挑戦するほど、どうしても由利の生まれ変わりがほしかった。そうして無事3女「奈見」を得ることができた。奈見は期待通り、由利によく似た（と思える）、すがすがしい顔立ちの子供であった。正常な出産をすることがこんなに感動的なことか。看護師たちに祝福され、わが子を抱き、病院の正面玄関から堂々と退院できるという当たり前のことに、ど

れほどの喜びを持ったか。奈見を抱くことで、私はやっと精神のバランスが取れるようになった。衣里も奈見もとてもノーマルな人格をもった子供たちで、二人の子育ての喜びにひたって、いつとなく由利にたいする想いが薄れかけていった頃のことである。

場所は不明だ。薄明のなかで赤ん坊の泣き声がする。細く長く続く。手探りでたどり着き抱き上げる。私の腕のなかで、赤ん坊は口を懸命に動かして、お乳を求めている。お腹を空かせて泣いているのだ。「生きたい、生きたい」と全身で私に訴える。じつとりと冷や汗をかき、表現できないような重苦しい気分が夜中に目覚め、眠られない夜を過ごした。それは一定の周期をもつて繰り返された。その夢は黒く、重く、私を不眠症にして、夢のもたらすものが何か、朝まで引きずる後味の悪さに何かと思いついて泣いたとき、泣いている赤ちゃんがまさしく由利だと思いついた。私は再び大いなる神を視た。由利が夢の中にあられて、「私を忘れないで」と抗議をしていたのだ。かつて、靈感など経験したこともない私は再び、神の領域ともいふべき大いなるものの前にひざまずいた。夢とは、靈魂とは、そして信仰とは何か、と。私が生きている限り、この胸の重しを取り除くことはできない。

サンフランシスコ在住の衣里は2000年、ミレニアムの一月、無事に女兒を出産した。私も渡米してアメリカでの出産に立ち会うことができた。

「ビューティフル」と興奮して喜ぶ衣里の夫のステイブ、「オー、オリエンタルルービー」と珍しがってかわるがわる抱き上げる陽気な看護師さんたち。病院では新生児を日本のように保育器に入れることなく、すぐに産婦の傍に連れてくるからスキンシップができるのだ。アジアとヨーロッパの血の混じった、個性的な顔立ちの赤ん坊は、おくるみでぐるぐる巻きに巻かれて大きな声で泣いていた。新しい命の誕生、それは改めて由利への罪を償うために、良き母、良き祖母としてこれからの人生を生きることを再認識させるものであった。

あれからもう20年が過ぎた。アメリカで穏やかな日々を過ごしていた長女衣里も鬼籍にはいり、私の周りは一層シンプルになった。死んだ子の年を数えるというが、今、衣里は56歳、そして由利ももう50歳を過ぎている。思えば、私は廃虚のような古家で25年、一人で過ごしてきた。長かったのか、短かったのか、まさに人生一雫の夢である。お盆というこの日本的な行事は、信仰などという理念とは無関係に、習慣としてすっかりと身に沁みついていて、回り灯籠の深海のような影絵のなかに、去っていった衣里や由利、夫の面影を浮びあがらせる。

詩人野口雨情の作詞、「シャボン玉」は今も愛されている童謡だが、この詩は生まれてすぐに亡くなったわが子にたいする雨情の鎮魂の歌だという。屋根まで飛ぶことなく、産まれてすぐにこわれて消えたシャボン玉に託し、追悼して書かれたものだというが、さりげなく歌われている童謡歌集でも、込められた深い意味がある。由利はきらめくシャボン玉のように屋根を超え、空高く飛んでそのまま、帰ることなく天上の人になった。

(2020年 9月)